

文化による「チェコ民族再生」

—ハプスブルク帝国下のボヘミアにおけるナショナリズムの動向—

内藤久子*

“Czech National Revival” through Culture

-The Nationalism Movement of Bohemia in the Habsburg Monarchy-

NAITO Hisako*

キーワード：文化ナショナリズム、民族再生、汎スラヴ主義、マティツェ・チェスカー

Key Words: Cultural Nationalism, National Revival, Pan-Slavism, Matice Česká

はじめに —文化とナショナリズム—

本論文は、19世紀、近代国家の成立に向けた民族の再生や復興を旨とする動きのなかで、まさに固有の「文化的所産」がいかに重要な契機となり得るかを主な論点として、ハプスブルク帝国時代のボヘミア地方（地図1）¹⁾を舞台に展開されたチェコ・ナショナリズムの発現における民族覚醒のプロセスを紐解きながら、チェコ人民のアイデンティティ形成とその軸となる伝統文化との関係性について、文化ナショナリズムの視座から考察するものである。

まず文化とナショナリズムの関係性について述べる前に、民族主義ないし国家主義と訳出される「ナショナリズム」の概念そのものについて確認しておくことにしよう。ハンガリー生まれでアメリカの歴史学者ピーターF. シュガーの定義によれば、そもそもナショナリズムとは、「各個人の忠誠心を何よりもまず重点的に、自分の住む民族国家に向けてよう要求して、人為的に作り出された集団感情であり、まさにそうした要求を正当化する理論である」²⁾と説明されている。とりわけ興味深いのは、ハプスブルク帝国下のプラハに生まれ、20世紀を代表するナショナリズム研究者として高名なハンス・コーンの言説であろう。彼はとくに東欧と西欧のナショナリズムを比較して、次のような考えに達したのである。即ち、「西欧ナショナリズムは、過去に対して余り感傷的に捉われることなく、現在の政治的な現実と政治闘争の中で、民族を作り上げる努力をしている内に登場してきたものであるのに対し、東欧の民族主義者は、しばしば過去の神話と未来の夢をもとにして、理想化された祖国像を創り上げたのであり、それは、過去と密接につながり、現在とはほとんど直接的なつながりをもたず、しかもいつかは政治的現実になるであろうと期待されたものであった…」³⁾。さらにアメリカの文化人類学者スタンリーJ. タンバイアが注目するのは、「民族としての主張や感情がどのようにして構成されるのか」といった点であり、「いかにして自明で本質的感情になるのかを、またそれらが社会化と参与を通してどのように思考や感情のパターンとして、我々の

*鳥取大学地域学部地域文化学科

心や身体に書き込まれるのか(儀礼, 日々の実践, 命名法, 親族名称, 料理, 衣装, 食卓を共にし食物を分け合うこと, 男女の交際や結婚についての社会的規制, 結婚式や葬式での振る舞いや格式に対する評価, 家の造り, 居住空間の構成, 建具やインテリアを通じて行なわれる), そのプロセスを知るべきだ⁴⁾と忠告している。

そもそも「民族のアイデンティティ」とは, 一体どのようにして形成されるのだろうか。とくに東中欧地域で議論される場合, 我々が何よりも注視するのは「文化的記憶の覚醒」といった点であろう。それと同時に, 近現代において顕著に見られるようになった, いわゆる「文化主義」に類する諸現象についても慎重に見極める必要があると思われる。なぜならば, 「文化主義」というこの標語は, 単に鑑賞用の, いわば「芸術至上主義」を重視する「物質至上主義の支配」, つまり「文化主義において文化を守る」といった, まさに「博物館的な文化のあり方」を示唆するものとして捉えることができるからである。⁵⁾ 文化人類学者の青木保は, これを「大衆ヒューマンズムに基づく見せかけの文化尊重主義⁶⁾と呼んでいるが, この点について作家の三島由紀夫もまた 20 世紀の半ばに, 当時の「文化主義」という風潮に対し鋭い批判を行った一人であった。即ち, 三島自身, いわゆる「創造力の枯渇に対応して, 一種の文化主義は世論を形成する重要な因子になった」ことを認めながらも, それがまさに意味するのは「…文化を血みどろの母胎の生命や生殖行為から切り離して, 何か喜ばしい人間主義的成果によって判断しようとする一傾向」であり, 「そこでは, 文化とは, 何か無害で美しい, 人類の共有財産であり, プラザの噴水の如きものである⁷⁾」として「文化主義」そのものを批判しつつ, (それと対峙する) 豊かな創造性にもとづくアイデンティティとしての文化的表象, つまり「真の精神文化」との差異を明言したのであった。

[地図 1]



1867年のハプスブルグ帝国

何れにせよ, こうした「文化主義」に類する諸現象や, 民族の精神的真髄を反映させるような文化的表象の有り様に見られる温度差に十分留意しながら, 再びヨーロッパへと目を転じるならば, 既にハンス・コーンが指摘したように, 東中欧諸国においては, まさに非現実としての「夢と神話」に彩られた, いわば理想化された祖国の像というものが創成されたとやはり考えられるのであるが,

それでは一体、どのような具体的な文化的表象を通して表現されることで、それがチェコ人民による民族覚醒のプロセスの中で、ある種の「文化的一体性」として彼らに認知されていったのかを、ここで改めて考察する必要があるかと思われる。そしていかなる所以から、そのような伝統文化への深いまなざしが、世紀末の中央ヨーロッパに最高の知的世界をもたらすに至ったのか、それらの足跡を丹念に辿りつつ、「文化による民族再生」の意義について洞察したいと思う。

1. 文化的・歴史的記憶－「英雄なるもの」の表象－

アメリカの歴史学者ヨーゼフ F. ザツェクが指摘するように、チェコ・ナショナリズムの始原は中世の末期、遅くとも 15 世紀初頭に遡ることができると考えられる。⁸⁾ しかもチェコ・ナショナリズムが最も高揚した時期というのは、一般に 15 世紀のフス派革命期および 18 世紀末から 19 世紀前半の「民族復興期」、さらに 20 世紀初頭のチェコスロヴァキア共和国独立の時代、それに第二次世界大戦直後の数年間という 4 つの段階を通して顕著に認められるとしており、言うまでもなく、チェコの人々は、その時々で他民族に抵抗したことに見られるように、当地域におけるナショナリズムの局面もまた、各時代に応じて、それぞれ民族的な一体性を強調してきたといえよう。

ところで、チェコ人のナショナリズム運動にとって最も決定的な要因となったのは、やはり地理的要因であり、さらにチェコ人・ドイツ人・ユダヤ人といった人種や言語上の問題であることは、もはや自明のことであろう。さらに「チェコ人としての文化的一体性」について考えるとき、それをより複雑化したのが、例えば歴史家フランティシェク・パラツキーの著作『ボヘミア、モラヴィアのチェコ民族の歴史』（1836）の中で強調された「ボヘミア・モラヴィアの歴史全体の主な内容とその本質的特徴は…ラテン世界およびゲルマン世界とスラヴ世界との間の絶え間ない交流と抗争である…」といった状況であった。⁹⁾ むろんチェコ人の民族意識は、こうして 19 世紀を通じて見事な発展を遂げ、また著しい成長を成し遂げたのであるが、何よりも顕著であるのは、彼らの民族意識が、重要な創造的・学問的活動分野すべてにおいて発揮されたという点であった。

ではここで、チェコ人のアイデンティティの根幹となり得る「文化的記憶」というものが、そもそもどのような作用を及ぼすに至ったのかを詳しく見ていくことにしよう。彼らにとってそうした記憶の主軸となるのが、まず「チェコ建国の神話の物語」であり、つづいて「中世期に栄えた文化的都市プラハの光景」や、さらに「歴史的英雄ヤン・フスの宗教改革」であった。これら遠い過去の歴史的記憶は、確かに民族のアイデンティティを構築する上で大きな力を発揮するに至ったのであり、それらの記憶こそ、まさに同地域が「夢と神話による民族の再生」を成し遂げる中で、明らかに重要な契機となり得たのである。初めに、チェコ建国の神話である、かの「リブシェ伝説」に光を当ててみよう。

1-1 チェコ建国の「神話」

いわゆる「リブシェ伝説」として知られるチェコ建国の物語は、プラハの町の創設にまつわる神話としてよく知られるものである。元来、「プラハ Praha」と称される町は、チェコ最初の公妃で超能力者であった「リブシェ」という聡明な女性が、当時、まだプラハの町がよく知られていなかった時代に、未来のプラハを幻想し予言するかたちで、チェコ語の「práh（プラーフ、つまり鴨居から敷居の意へ変化したとされる）」から取られたと伝えられている。¹⁰⁾

この伝説は、チェコ最初の年代記作家として知られるコスマスが、ラテン語で書いた『チェコ年

代記』(これは『コスマスの年代記』として知られるもので、1120年代の作とされる)に掲載されており、これと同様の物語が、チェコ語で書かれた最古の年代記『ダリミルの年代記』(1314)にも記載されていることが分かっている。またカレル一世の年代記作者であったプルカヴァがラテン語で執筆したとされる『チェコ王たちの年代記』(1370)によれば、「リブシェの居城と予言の舞台」が、これまでの「リブシーン城」から「ヴィシェフラット城(高い城)」に変更されているとも指摘されている。その内容は、以下のように書かれてある。¹¹⁾

「チェフ(チェコ人の意)という名の長老に率いられてチェコの地に定住するようになった人々の子孫に、クロクという優れた男がおり、その3人の娘の内の末娘がリブシェであった。才色兼備で品行方正、かつ予言能力も兼ね備えるリブシェは、クロクの死後、裁判官に任命された。ある時、兄弟の相続争いを公平に裁くが、兄の方は女性に裁かれたことに不服を申し立てる。これに心傷ついたリブシェは、主権と裁判権を男性の手に委ねようと配偶者を決める。田舎貴族のプシェミスルがこれに選ばれて、人民に審判者、君主となることを告げる。プシェミスルが統治した初めの頃、リブシェはある日、未来のプラハを幻視し、栄光ある未来を予言する：…あなた方が建てる城はプラハと名づけられるでしょう。…こうして全チェコ人を支配するプラハ城が建設され、リブシェはプラハの創設者となった」と(但し、リブシェはあくまでも伝説上の人物で、その実在は未確認とされている)。

1-2 ボヘミアの黄金時代

「リブシェ神話」に続いてチェコ人民のアイデンティティを表徴するのが、14世紀ボヘミアの黄金時代であろう。歴史を遡れば、プシェミスル王朝後の1310年、ルクセンブルク家のヨハンがボヘミア王に即位し、ドイツ文化の影響が強かったこの国に、フランスとイタリアの文化がもたらされることとなったのだが、そのヨハンの子で、チェコ人に親近感を抱くボヘミア王であったルクセンブルク家のカレル一世(神聖ローマ帝国皇帝カール四世を指す;在位1346-1378年)の時代になると、ドイツ語とドイツ文化は、チェコ人の間にたちまち浸透していった。とりわけボヘミア貴族がドイツの騎士制度の虜となった為に、ドイツ文化はより一層深く浸透していくことになる。それと同時に、チェコ人自身の文化もまた、同族人としての民族的自覚の高揚や「外国からの侵入者」に対する憤慨が高まりを見せるとともに、急速に展開していったのである。

こうしてボヘミアの諸都市では、カトリック教徒のドイツ人市民たちが大挙して脱出することによって完全にチェコ化が進み、とくにチェコ人新興ブルジョアジーらの活躍する場と化したのである。この間、チェコ語方言は宗教改革者ヤン・フスの手によって磨きかけられ、さらにチェコ語は微妙な文語的表現を増すとともに、フス派教会の礼拝語としても採用されるようになり、次第に宮廷や都市の行政機関でも用いられるようになっていった。また1348年には中央ヨーロッパ最古の大学となるプラハ(カレル)大学が創設され、プラハの人口は忽ち35万人を超えた。1447年にはプラハに大司教座が置かれるようになり、ボヘミア教会の独立が果たされたのである。このようにして貴族と高位聖職者に支えられた君主制から成り立つボヘミアの国家組織は、1355年には神聖ローマ帝国皇帝の座に君臨し、ボヘミア王国をドイツ帝国の中心と位置づけるようになった。チェコ語はこうしてボヘミア王国唯一の公用語となるのであるが、但し、プラハの黄金時代は、やがてこのカレル一世の死とともに終焉を迎えるのであった。¹²⁾

I-3 フス教徒運動

当然の事ながら、中世期フス派の経験はチェコの人々にとって、当該民族としての意識の成長に深い影響を及ぼすものとなった。カレル一世の時代には、民衆の中から、富裕な教会を改革して「聖書の精神に立ち戻る」といった宗教改革運動が勃発する。その指導者と崇められたヤン・フス (Jan Hus; c. 1370-1415) は、1402年にプラハのベツレヘム礼拝堂において、貴族から小市民に向けてチェコ語の説教を行い、7年後の1409年にはプラハ大学総長に就任した。周知のように、無敵フス派の軍隊である「汝ら神の戦士」（つまり、神の意志を果たす為に厳格な掟と強固な信念をもって戦闘に赴く）は、カトリック・ドイツの繰り返す十字軍を5回撃破したと伝えられ、そのような目覚ましい軍事的成功において、無論、チェコ人の民族的自負心を大いに鼓舞するに至ったのは言うまでもない。とりわけ南ボヘミア地方の町ターボルはその強靱なフス教徒の本拠地として、総大将J. ジシュカ (1360-1424) の指揮の元に十字軍を撃退した歴史的なシンボルの地とされ、このときフス派の賛美歌であるコラル《汝ら神の戦士なり》（歌詞：「汝ら神の戦士なり、神の掟に服従するなり、神のご加護を祈り、神を信じたまえ、汝はついに神と共に勝利を得るだろう」）が、敵の十字軍を威嚇すべく戦場で高らかに歌われたと伝説的に語り継がれている。

さて1420年8月1日、カトリック・ドイツを中心とする十字軍の遠征が現実のものとなり、民衆と一部の貴族らの支持をうけたフス派は「共和政府」の樹立をめざす。その一方で、大貴族とドイツ人たちは、神聖ローマ帝国皇帝ジギムント側に加担する。その結果、この戦いは、いわば社会階級間紛争の性格を強く帯びるものとなり、これによって、それまで調和を保っていたドイツ系住民とチェコ人との対立が激化し、1420年から36年までの間、ついに歴史的なフス戦争が幕を開けることとなったのである。

II ハプスブルク帝国下のチェコ人による「民族再生」運動

周知のように、かのヤン・フスの殉教後、チェコ人の歴史は、さらに1620年の「白山 (bílá hora) の戦い」で壊滅的な敗北を帰し、完全にハプスブルク家の属国となった。このボヘミア・プロテスタント派對カトリック・ハプスブルク家の戦いにより、チェコ人民は、チェコ語の使用権や歴史的自治権等をほぼ喪失する。加えて、貴族層とブルジョアジーの4分の1、(チェコ兄弟団を含む) チェコ人知識階級の中核に当たる、およそ3万6千世帯もの人々が、追放ないしは自発的に国外への移住を余儀なくされたのである。その結果、ボヘミアとモラヴィアの全人口は約300万人から90万人へと激減する。そこにドイツ人の入植者が移住した為に、プラハは以降19世紀半ばまで、いわゆるドイツ人の都市として、しかもカトリック教のみが公認の宗教と認められたのである。即ち、公の機関や社交界では無論ドイツ語が公用語として用いられ、それは貴族やブルジョアジーの唯一の使用言語と認められる一方で、チェコ語は最下級の教区学校で教えられるに留まり、いわば下僕や農民らが用いる不完全な言語と化したのであった。

しかしながら、ドイツの哲学者で神学者のヨハン・ゴットフリート・ヘルダーが提唱した多元的文化主義思想の移入に伴って、18世紀末頃より民族復興の気運が次第に高まりを見せるようになる状況は一変する。1781年にはオーストリア皇帝ヨーゼフ二世の命によって、まず「信仰に対する寛容を回復する」（即ち、チェコ・プロテスタント精神を解放し、検閲の権能を聖職者から取り上げる）といった内容の寛容令が発令されることとなり、その結果、フス時代の過去を研究するといった契機が生じたのである。元来ハプスブルク帝国は、直属領内での政治的独立性といった側面を否

定しながらも、文化的には最大限の自治を奨励しており、故に文化的には充実した幸福感を感じさせるといった政策を打ち出していた。この「ヨーゼフ主義」と呼ばれる体制は、主に18世紀後半から19世紀中葉にかけて、ハプスブルク帝国の近代化の過程で生じた思想的・政策的時代の潮流として、そこには「政治・宗教・文化などのあらゆる分野に渡って、古来のバロック的世界観と新時代の啓蒙主義的精神との間を仲介し、両者の対立をほど良き妥協(アウスグライヒ)の状態に導こうとする一種の混合主義の傾向」¹³⁾が見られたのである。こうしてヨーゼフは、カトリック信仰優位を堅持した上で、「他の宗教や宗教団体に対する信仰の自由および寛容の原理」を公式に表明したのであった。

さらに事実上、農奴制が廃止され、それによって才能ある有能なチェコの農民は、自由のない労働要請から漸く解放されることになった。即ち、農村での人口爆発を懸念して「農奴解放令」が発令された結果、チェコ語を話す農村出身者が都市部に流入し始め、チェコの知識人らはそうした状況を間近に見て、チェコ語やチェコ文化を見直す動きが次第に本格化していった。ヨーゼフが提唱した「農民解放令」は、こうして農民の生活に「安定」という文字を与えたのみならず、信仰の自由を宣言し、農民たちに学びの場である「学校」を与えるものとなったのである。時を同じくして、ボヘミアでは漸く中産階級が台頭する気配を見せるとともに、農業社会から産業社会への移行が始まろうとしていた。そして富裕な貴族の愛国的運動と中産階級の進歩的な民族運動とが並行して進む中で、次第に評論家・歴史家・詩人らによる「文化的覚醒」が押し進められていったのである。

このようにオーストリア皇帝ヨーゼフ二世が発令した寛容令は、まさに18世紀末から19世紀前半にかけて、チェコ人知識人と、さらに農民層、即ちチェコ語や民謡等、いわゆる民族精神が横溢する「フォークロア(民間伝承)」の世界に生きる人々との接触を現実のものとした。加えて、ドイツ系貴族たちによる、チェコ人知識人への支援も行われるようになった。こうしてチェコの人々は「民族復興(再生)期(národní obrození)」(c. 1780-1848)と称される歴史的な「民族覚醒の時代」を迎えることにより、言語・歴史・文学・音芸術といった各分野でそれぞれの復興に力を注ぐこととなったのである。

II-1 スラヴ人としての覚醒

ではチェコ人の心のなかに、「スラヴ民族としての覚醒や誇り」はどのように刻まれていったのであろうか。その重要な契機と考えられるのが、まずJ.G.ヘルダーによって全スラヴ人に発せられた言葉であった。即ち、「かつて存在した幸福な状態から深淵にはまりこんでしまったスラヴ人諸君、諸君らにはついには長い怠慢な眠りから醒める時がやってくるであろう。そして奴隷の鎖から解き放され、アドリア海とカルパティア山脈、ドン河とモルダウ河に挟まれた美しい地域を再び諸君のものとしていくつしみ、そこで再び平和な労働を賛美する祝宴を開くことができるようになるだろう」と。¹⁴⁾

ヘルダー自身は特に「民族精神(Volksgeist)」について論じた哲学者として知られる他、フランス啓蒙主義の科学的合理主義や進歩的信仰に反対するロマン主義的な反抗精神の立場に立つ人物でもあり、その考えは、「母国語、民族固有の伝統や文化、それにフォークロアといったものすべてが各民族のアイデンティティを形成する上で最も重要な要素となり、とりわけスラヴ民族にはその最高の運命が約束されている」¹⁵⁾と説くものであった。さらに何よりもヘルダーが重視した「多元的な文化概念」、即ち、「cultures」(複数の文化)という考え方は、次のような歴史的かつ文化的差異化に関する彼自身の言説に示されていると確信することができよう。例えば、「国民の文化的的生活全

体は、国民が共有する歴史的経験から生じるある伝統の流れから形成される」としており、それゆえ、「…すべての民族集団の言語や文化を尊重する必要がある」¹⁶⁾との立場に立脚して、何よりも「人間の諸集団は、共通の伝統と共通の記憶によって形成されるのであり、この伝統や記憶をつなぎ止め媒介するのが言語である」という主張を貫いたのである。つまりヘルダーは、「人間はそうした言語やその他のシンボルを用いて思考するのであり、人間の感情や態度は、詩であれ礼拝であれ、『象徴的形式』により具体的に表現される…」と考えたのであった。そこでは「歴史的記憶・言語や文学・文化的産物を介して国民が何らかの有機的一体を作り上げる」と述べられており、¹⁷⁾そうしたヘルダーの思想は、言うまでもなくスラヴ人の復興に多大な影響を及ぼすに至った。ヘルダーはとりわけ「スラヴ民族の精神文化」を高く評価することで、まさに新しい時代のギリシャ文化に匹敵する程の音楽文化の発展を扇動し得るものと考えていたのである。

II-2 スラヴ人の「民族再生運動」(1780-1848)

18世紀末から19世紀の1870年代にかけて東欧の諸民族に広く見られた文化運動は、一般に「民族再生(覚醒)運動」と呼ばれている。この運動の特色は、何よりもまず「文化」の領域で始まり、のちに政治色を強めるといった特色を有するものであった。そもそも「民族再生運動」とは、「強大な異民族支配の下で、民族がその過去を忘却し消滅するかもしれない」という切迫した危機感から発したものと推される。それゆえ、この運動の主たる関心事は、まずもって言語および歴史にあると考えられたように、その開始時期にはすでに民族語(つまり文章語)をもち、しかも初期の段階で早くも啓蒙思想を摂取しており、特に言語や歴史研究の分野において先んじているのが特色であった。何よりも民族の起源の問題が強い関心を引き、そうした論争が、いわば最終的に「スラヴ学」を誕生させる契機になったのと同時に、当然、「スラヴ学」の著しい発展をも促したのである。

周知のように、スロヴァキアの文芸復興期の代表的詩人でウィーン大学のスラヴ古代学の教授を務めたJ. コラル(1793-1852)やスロヴァキアの学者で詩人の民族運動指導者P. J. シャファリーク(1795-1861)らは、スラヴ民族がゲルマンやロマンス系諸民族と同じように古い起源をもつ民族であり、その数と勢力において後者を凌駕していたことを強調した。つまり、スラヴ人の優位性を唱えたのである。歴史的関心事はまた、過去の民族的栄光を想起するものとして表れ、既述のように、チェコ人は中世期のフス戦争(1419-36)を賛美した。換言すれば、ロマン主義時代の覚醒者たちはフスの時代を再発見し、それを「チェコ史の核心」に据えたのである。しかもそうした「民族再生運動」の思想は、チェコの場合、広汎な「民衆的基盤」を有していたがゆえに、より民主的な性格を帯びたものであったといえるだろう。

こうしてチェコ地域における民族復興の第一の局面は、まずボヘミア貴族や学者グループ、主として聖職についていた歴史家(ヨゼフ・ドブロフスキ他)らによる「ボヘミア愛郷主義」というかたちで表面化されることとなった。つづく第二の局面では、何よりもチェコ人の「文化的復活」として顕著な方向が示されたのであり、民族覚醒者のいわば第2世代であるユングマンや、パラツキー、コラル、シャファリークらに代表されるように、彼らの出自は下層中産階級かやや裕福な農民層の子弟であって、モラヴィアやスロヴァキア出身のルター派が圧倒的に多くを占め、同じように滅亡寸前のチェコ民族を再生させようとの大願を抱いていた。そして彼らはまず言語と文学の復興を必要とし、何よりも不完全な方言であったチェコ語を、まさに「民族文学」を生み出すに相応しい洗練された媒介物に変えることを要したのである。¹⁸⁾

II-2-1 ライプニツ調和説¹⁹⁾

ところで、19世紀前半における「ボヘミア主義」の精神的な支柱となったのが、いわゆる「ライプニツ調和説」と呼ばれる思想であった。つまりボヘミア哲学の生みの親と言えば、明らかにゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニツ(1646-1716)を挙げることができるだろう。彼自身、1712年から14年までの間、ハプスブルクの帝都ウィーンに滞在しながら、『单子(モノド)論』や『自然と恩寵の原理』(1718)等を執筆したことでよく知られている。その理論は、まず「宇宙が無数の单子と呼ばれる知覚能力を備えた存在からなり、それは神を頂点とするヒエラルキーを形成している」とするもので、「各単子は一つ一つが独立して他のモノドと結びついており、宇宙はその隅々までもが調和の精神に満ちている」と唱える言説であった。²⁰⁾

さらにその継承者として知られるのが、ボヘミア生まれの論理学者で神学者のベルナルト・ボルツァリーノ(1781-1848)らであり、彼を含むカトリック教徒たちは、19世紀前半に思想的ヨーゼフ主義ともいうべき運動を推進していったのである。具体的には、学校の建設や合理的神学の普及、さらにはチェコ人とドイツ人らの融和を図り、人文主義的教育と実践的訓練との一体化をめざすようになっていく。ボヘミアの教師たちは、生徒たちに社会改革や政治参加の大切さを教示することになるのであるが、1860年以降、チェコの自治権要求運動を指導したのは、実はこれらの学校で教えを受けたチェコ人であったという。

しかしながら、19世紀も半ばを過ぎると、チェコ系とドイツ系の民族抗争が一層の激しさを増すようになり、こうしたライプニツの宇宙調和説もまた行き詰まりを見せるようになっていった。つまりボヘミアの思想家たちは、ある意味で、かの「ヨーゼフ主義」や「ボヘミア主義」の限界を悟るようになったと推され、次第に彼らは、善神と悪神の闘争の世界を描く「マルキオンの世界観」へと惹かれていく。その一方で、明らかに敵対するチェコ人とドイツ人との狭間で困窮し、いわゆる「世界没落の幻想」へと逃避していったのがまさにユダヤ人たちであった、とW.M. ジョンストンは19世紀チェコの社会思想をこのように分析している。²¹⁾

II-2-2 「マティツェ・チェスカー(スラヴ民族再生運動)」

「マティツェ・チェスカー」と称された同時代の活動は、いわゆる「マティツェ Matice」という文化団体を中核とする、19世紀オーストリア国内の「スラヴ民族再生(覚醒)運動」として知られるものである。「マティツェ」とは「母、ないし多産」を語源とする南スラヴ語であり、「女王蜂」を意味する言葉である。この活動は、いわば民族語の普及や民族文化の保存を目的としたものであり、この他にも文化財の保護や学生の学費援助、さらに他のスラヴ人地域との人的交流、それに雑誌や書籍の交換等も試みている。こうして1831年にブラハで創設されたのが、チェコ人による「マティツェ・チェスカー」という組織であった。この組織は歴史家F. パラツキーや言語学者J. ユングマンらの指導を受けて、独自の雑誌を発行するかたわら、文法を整えて百科事典やチェコ語辞典の出版助成を行い、純文学や学術作品を執筆して雑誌や新聞を発行した他、古いボヘミアの文化施設をチェコ人の所有とし、新たに施設を建設することで、チェコ人知識層の民族意識の高揚に大きく貢献するものとなったのである。

まず最初にこの運動の先鞭をつけたのが、スラヴ言語学の父と評されたヨゼフ・ドヴロフスキー(Josef Dobrovský, 1753-1829)であった。彼が成し遂げた功績は、何よりも『チェコの言葉と文学の歴史』(1792)を著わし、チェコ語の表現手段の機能を復活させたことにある。さらに風俗や習慣においてもスラヴ諸民族に共通のものを発見したドヴロフスキーの偉業は、後に展開される「文化

的な汎スラヴ主義」の原点にもなったことで知られる。

続いて、このドブロフスキーの言語学研究を継承・発展させたのがヨゼフ・ユングマン（Josef Jungmann, 1773-1847；1839年よりブラハ大講師）である。彼は5巻からなる『チェコ語＝ドイツ語辞典』を編纂し（1834年から39年までの間）、弟子たちと共に「ユングマン学派」を結成した。また多くの外国文学（主に西欧ロマン主義文学）の翻訳を手がけ、中でも『チェコ文学史』を著わした功績は、文学界における彼自身の揺るがぬ地位を確立した証左といえよう。

さらに、(既述の)歴史学者で連邦主義者フランティシェク・パラツキー（František Palacký, 1798-1876）の名に注視すべきであろう。モラヴィア地方北東部の、いわゆる「チェコ兄弟団」信奉者の家系に生まれたという出自をもつパラツキーは、『ボヘミアとモラヴィアにおけるチェコ民族の歴史』[ドイツ語版第1巻1836；チェコ語版1848]を通して、ヤン・フスによる宗教改革時代のチェコ史について執筆するという偉業を成し遂げた。いわばチェコ民族とドイツ民族の対立を強調しながら、まさに栄光に満ちたチェコ人の歴史を描いたのである。彼はまたチェコ民族史家としても活躍し、「王立ボヘミア科学協会」および「ボヘミア民族博物館」（1818）の会員権役員を歴任している（1827年からは編史官を務め、同館発行の雑誌編集を担当）。さらに「美術館新聞」（1827）や文化団体（出版基金団体）「マティツェ・チェスカー」の創始者として、国民劇場設立委員会の一員等を務めた。とりわけ1848年から76年までの間、チェコ人の重要な政治的代弁者でもあったパラツキーは、娘婿のF.L.リーゲルと共に「老年チェコ党」を率いつつ、汎スラヴ主義を発展させて全スラヴ族に共通の文語を作り出そうとした。彼自身、いわゆる帝国という枠組みの中でスラヴ民族の存続を希求した人物として知られるが、その思想は「オーストリア・スラブ主義」とも呼ばれ、たとえば次のような書簡を通して、彼自身の思想の真髄を窺い知ることが出来るだろう。即ち、

「私はドイツ人ではありません。少なくとも私自身は、自分がドイツ人であると認識したことはありません。私はスラヴ民族に属するチェコ人であり、わが民族は小さな民族ではありますが、歴史上、常に民族としての独自性を保ち続けてきました。チェコ民族の歴代の君主は、ドイツ人君主と強調して国を統治してきましたが、チェコ人は決して自らをドイツ人であると考えたことはありません。いまあなた方は、独立国家としてのオーストリア帝国を弱体化させ、帝国の解体を齎らそうとしています。しかしオーストリア帝国の一体制、その国家としての発展は、わがチェコ民族にとってのみならず、ヨーロッパ全体、人類全体、そして文明そのものにとってきわめて重要なものであります。」²²⁾

加えてパラツキーは『ボヘミア史』5巻（1836-67）を著す中で、「チェコ人は武力でローマ・カトリック教に再改宗させられたヨーロッパで唯一の民族だが、今尚ボヘミアにはフス派の精神が脈打っている」と主張した。こうして打ち出された「オーストリア・スラブ主義」の思想は、むしろ文化的色彩が色濃く表出されていたように、自ら率いた「老年チェコ党」もまた、ドイツ人ピアリスト会士フェーリクス・ドブナーや元イエズス会士ヨゼフ・ドブロフスキー、それにギムナジウム教授のヨゼフ・ユングマンらの手によって、いわゆる「チェコ語の復権運動」を広く推進していくことになった。

他方で、「民族再生運動」は、確かに目に見えるかたちでの、まさに博物館的な「文化主義」を想起させるような様々な「文化機関」の創設を客観的な拠り所としたこともまた事実であった。例えば、ボヘミアでは学問研究の中心としてのチェコ王立科学協会（1784）を初め、プラハ音楽院（1811）や、民族文化を重視したドイツ人思想家J.G.ヘルダーの思想に倣うボヘミア王立博物館（いわゆる民族博物館）（1818）、それに理工科学校（1707年設立；後の技術教育高等学校 [1806]）

等々。そして、プラハ大学にチェコ語とチェコ文学の講座が創設(1791)されたのもちょうどこの頃であった。大都市ではゲルマン化の波が後退していく一方、農村においてはカントル(ここでは村の学校教師を指す)や農民出身の村の司祭たちが民族性の自覚を促すのに尽力するとともに、いわゆる「民族語教育」の普及にも務めることとなったのである。

これらの動きに連動するように、音楽界においても、次第に新たな文化機関が整備されていった。まず1803年のプラハで、定期的室内楽や管弦楽の演奏会を組織する「音楽協会」の設立を見ることがとなった。因みに、19世紀初頭のプラハにおける劇場の様態は、常にドイツ語主体で上演される「スタヴォフスケ劇場」と、さらに1842年、新たに開設されたチェコ語による上演を主体とする「新劇場」の2つに区分されていた。これらに加え、舞踏会、宴会、サロン、カフェ・コンサート等の催しに代表されるように、いわゆる「娯楽の大衆化」が顕著に進行していった。しかもそのような場での主な演し物と言えば、ワルツ、カドリユ(フランスの舞踊)、ポルカ(ボヘミア農民の円舞から発達)、チャールダーシュ(ハンガリーの民俗舞踊)等々に見るように、実に地域的で多様なフォークロアの様相を呈していたのである。

III 1848年以降の「汎スラヴ主義運動」

19世紀前半のボヘミアに広く浸透していた「ライブニツ調和説」に対峙するかのようになり、19世紀半ばを過ぎると、都市プラハはドイツ人の支配に対するチェコ人の激しい抵抗の歴史に彩られた町として知られるようになった。つまり、ボヘミア地方では、革命を成功させたドイツ人とチェコ人による自由主義勢力が、ドイツ人の民族主義とチェコ人の民族主義の対立により、まさに内部から崩壊の一途を辿ろうとしていたのである。ボヘミアのドイツ人たちは、チェコの知識人らが抱く「汎スラヴ主義的」な傾向に不安を感じ取り、ボヘミアの地を寧ろ大ドイツ主義にもとづく「統一ドイツ帝国」に編入させるべきだと考えていた。それに対し、チェコ人が抱く反ドイツ感情というのは、1848年6月2日、オーストリア帝国内のすべてのスラヴ民族を招集して催した「スラヴ人会議」のなかで噴出したのである。無論チェコ人らは、拡大ドイツ連邦に吸収されることを拒否する立場を取り、「帝国内での部分的自治の方を選択すること」を表明した為であった。こうしてオーストリア政府は、6月15日、プラハを占拠するという強硬な手段に訴えることによって、スラヴ民族会議を解散へと追い込んだのである。

1867年、モスクワで開催されたスラヴ人会議で示された人々の感情や種々の宣言は、「チェコ的」というよりも寧ろ「汎スラヴの性格」を強く打ち出すものとなった。即ち、「何百万人のスラヴ民族との血縁や人種的結束を強調することにより、自分自身の挫折を偉大なスラヴ人の未来への大きな展望によって相殺した」のである。しかしながらこれによって、1848年以来、ボヘミアのチェコ人とドイツ人住民との間に、いわば「人種的」な反目が見え始めるようになる。その一方で、チェコ人やスロヴァキア人らの重要な政治指導者らは独立国家を要求せず、まさに1914年の段階においてもチェコ人愛国者の多くは、「ハプスブルク帝国内での完全自治」という処遇で満足していたのである。²³⁾

III-1 1860年以降のボヘミアの民族運動 - 民族意識の高揚と新たな文化機関の設立 -

およそ1848年の3月革命から1918年のハプスブルク帝国崩壊までの半世紀の間、ウィーンやブダペスト、それにボヘミアを中心に、農業社会から工業社会への移行が顕著に見られるようにな

る中で、まず知識人たちがそうした民族問題にいかに対応したのかをしてみることにしよう。当時、少数民族であったドイツ系知識人たちは、既述のように、1860年までボヘミアに広く浸透していた、いわゆる「神と創造世界の間に調和を見る」という「ライプニツ調和説」を説いて、あくまでチェコ人との融和を希求していた。これに対し、チェコ系知識人の側は、逆に「民族の復権」を強く目指すようになっていく。さらに1860年以降になると、(F. パラツキーの路線に不満をもつ急進的な)「青年チェコ党」が独自の民族運動を展開したことにより、両者の対立にさらなる拍車がかかった。こうして19世紀半ばには、もはやチェコ人とドイツ人との友好を深める公的な場というものは、結局のところ、1859年のシラー生誕百年祭を最後に、まさに終焉を迎えることとなったのである。

このようにチェコ人の民族意識というのは、むしろ文化的創造や学問分野すべてに反映されていると見ることができると同時に、その結果として、多くの優れた逸材を世に輩出する契機にも繋がったと考えられる。加えてそのことは、1860年以降、いわゆる公共の施設である様々な文化機関を通して強く象徴化されることになった。それらの中で最も重要な機関となるのが、まず「ソコル」(1862)であり、第二に「チェコ人だけのプラハ大学」(1882)、そして第三に「チェコ国民劇場」(1883)であった。

III-1-1 ソコル

ミロスラフ・ティルシュ(1832-1884)らが創始し、チェコ人体育団体として広く知られるようになった「ソコル運動」は、1862年以降、特にチェコ人の民族意識を高揚させるのに十分な役割を果たしたと考えられる。この運動はスポーツ団体を組織して、つまり「スポーツ活動を通して政治教育を行なうという理念」を掲げていた。こうして1862年には「ソコル」(チェコ青年スポーツ団体)の組織が創設されることになり、これによって体操、遠足、スポーツの趣味といった実践が普及する弾みとなったのである。そもそも「ソコル」とはスラブ語で「鷹」を意味する言葉であり、いわゆるドイツの学生運動に大きな影響を与えたドイツの「体育協会」を範とするものであった。

確かに「ソコル」の規約によれば、この組織は、肉体と精神の鍛練、芸術と科学、すべての倫理的手段によって祖国を復興させることを目的とする団体であると規定されていたように、「永遠の進化」、または「永遠の不滅」をモットーとしながら、同組織は全国に一万五千人もの会員を数える機関として、民族運動そのものに十分奉仕するいわば武器ともなったのである。その結果、1882年以降、6年ごとにプラハで開催された代表者会議および全国統一訓練体操である「スレット」は、当然の事ながら、壮大な「愛国的・民族的な示威運動」と化したのであった。但し、第二次大戦後の1949年を過ぎると、チェコ人によるこの「ソコル」運動は、新たに「労働者体育協会」という組織に名称を変え、引き継がれていくことになる。²⁴⁾

III-1-2 チェコ人だけのプラハ大学

1882年、ターフェ首相の決断により、およそ20年以上にわたってチェコ人が要求し続けてきたチェコ系の大学がついに誕生することになり、その結果、旧来のプラハ大学は、分割されることとなった(因みに、当時はチェコ系大学に通う学生の方が多かったという)。1863年、既にチェコ系とドイツ系に分離していたプラハ工科大学は、6年後の1869年にそれぞれ独立した大学として再編されるに至ったが、老チェコ党のF.L. リーゲルは、1866年の段階で、プラハ大学についてもこれと同じような解決を要求した。その意味は、チェコ人学生に向けてチェコ語で講義を行うという、まさにチェコ系大学の分離独立にあった。またチェコ系ギムナジウムの開設に見られるように、役所

でもチェコ語の専任係が置かれるようになった。さらに1890年、ターフェ内閣は、ボヘミアをチェコ人地域とドイツ人地域に分離する案を提出したのだが、ボヘミア全域の支配を望む青年チェコ党の反対で、それは実現に至っていない。こうしてチェコ人とドイツ人の敵対関係は、むしろ言語のみならず、各方面に波及していったと見ることができるだろう。

こうした言語の問題は、特にドイツ人とチェコ人とを明白に離間させることを強く誘引したといえる。言うまでもなく、1897年に首相バデーニ伯爵が公布した「言語令」(即ち、ボヘミアとモラヴィアで全ての官吏に、ドイツ語とチェコ語を用いて執務するよう義務づけた内容。1899年に廃止)は、その対立をより激しく加速させ、結局、同言語令の審議をめぐって帝国議会はバデーニの辞任を迫ったのである。プラハでは暴動が起り、またドイツ語が通りの名から消えてしまうといった事態に陥っていた。このような対立の中で、当然の事ながら、ドイツの作曲家ヴァーグナー作のオペラ上演回数は、明らかにイタリアの作曲家のベルディのそれよりも減少の傾向にあった上、何よりも暴徒がドイツ劇場を取り巻いて騒ぎを起こすほどに、状況は悪化の一途を辿っていた。

但し、ボヘミアとは異なり、東に隣接するモラヴィア地方では早くも1905年に妥協案が実を結ぶこととなった。というのもモラヴィア地方には以前から、ドイツ人とチェコ人の家庭で子供を交換したり、それぞれの言語を学ばせる等の習慣があった為だという。他方、プラハの町では、確かにドイツ語、チェコ語、イディッシュ語が併存していたものの、つまり貴族たちはフランス語を話し、下僕らはチェコ語の世界に生きていたのであるが、そのような状況の中で、ボヘミア系ドイツ人の不満が頂点に達するようになり、彼らは特にチェコ北部の「ズデーテン・ドイツ人」として、逆にドイツ人の一体化を叫ぶようになっていったのである。²⁵⁾

III-1-3 「国民劇場 Národní divadlo」の創設

様々な文化的機関の中で、とくに重視された「国民音楽」の創造を実現する場として祭りあげられたのが、かの「国民劇場」であった。既にチェコ社会では商業中産階級の台頭が見られ、帝国東部のブルジョアジーたちは、その知的かつ芸術的エネルギーを、当然の事として民族主義の為に奮い起こすまでとなっていた。こうした社会の変動とともに、スラヴ人による民族主義の増大する力は、やがて「汎スラヴ主義運動」として統合されるようになっていったのである。

19世紀後半になると、チェコ人とドイツ人の敵対関係は、「音楽文化」そのものにも明白に現われるようになった。プラハの「スタヴォフスケ劇場」は、世紀を通じてドイツ語でオペラを上演することを常としていたが(1888以降は「新ドイツ劇場」が設立される)、その一方で、1862年11月18日には、チェコ文化を最も象徴する出来事として「国民劇場仮劇場」が開幕し、その後1868年に着手された「国民劇場」は、5月16日に定礎式が盛大に挙行され、以後13年の歳月をかけて1881年に漸く完成を見ることとなったのである。とはいえ、同劇場は6月11日、こけら落としにスメタナのオペラ《リブシュ》を上演して華々しい開幕を告げたものの、そのわずか2ヶ月後の8月12日、火事で建物を焼失してしまうという不運に見舞われた後、再開幕されたのは、漸く1883年11月18日のことであった。

こうして中央ヨーロッパ東部全域では、いわゆる「国民劇場」に類する文化機関が急増していった。既に1869年にはベオグラードに、1870年にはザグレブにも設立され、さらに1884年にはブルノにも国民劇場が創設されたのである。もっともこうした文化機関は、確かにそれぞれの地において、最も顕著な文化の具象的表徴として機能したのは言うまでもない。それらに連動するようにして、当然、合唱団や音楽団体などの成立に向けた動きがより活発化していったのもごく自然の流れ

であろう。周知のように、1860年には男声合唱団「フラホル hlalhol（「響き」の意）」がニムブルクに結成され、その翌年にはプラハに、そしてその翌年にはブルゼニューにも創設された。さらに1863年になると、一流の芸術家たちを構成メンバーとする「芸術家協会」が、プラハで産声を上げたのである。

III-2 文化ナショナリズムの構造パターン - 民俗文化と高踏文化の融合 -

ナショナリズム研究の第一人者であるアーネスト・ゲルナーは、基層文化であるフォークロア（民間伝承）との関係において、「ナショナリズムは以前から存在し、歴史的に継承されてきた文化や文化財の果実を利用する。ナショナリズムはそれらを選択的に利用、しかも根本的にそれらを変造してしまう。伝統が捏造され、ほとんど虚構にすぎない大昔の純朴さが復元される」²⁶⁾と述べている。確かにナショナリズムが自己表現を行なう舞台となるのは、スポーツの他、何よりも「文化的な創造の場においてである」というのは、恐らく衆目の一致するところであろう。

事実、ボヘミアでは、かの「リブシェ伝説」を題材として、それを様々に「作品化」することで、具体的な文化的創造へと誘われていったと見られる。たとえば、叙事詩「リブシェの裁判」（『ゼレナー・ホラの手稿』）、ゼイエル『リブシェ』（1880）、イラーセク『チェコの古伝説』（1894）の中の「リブシェの予言」、スメタナのオペラ『リブシェ』（1869-72）、連作交響詩『我が祖国』第一曲「ヴィシェフラト」、美術：ミスルベクの彫刻「プシェミスルとリブシェ」（1881-82）、ムハ（ミュシヤ）の絵「リブシェ」（1917）等々。このように、いわば高踏かつ洗練されたチェコ民族文化を形成する過程においては、まさにゲルナーが主張するように、「文化的差異化を基礎として、高文化を創り上げる」のであり、即ち、そこには「新たな高文化の創造の為に、民俗文化が利用される」という構図が描かれるのである。²⁷⁾ 言うまでもなく、18世紀末に始まったヨハン・ゴットフリート・ヘルダーによるボヘミア民謡の収集に端を発するフォークロアへの開眼は、²⁸⁾ 高文化として昇華され得る「チェコ民族文化」をその基層部分から創成することにおいて、ナショナリズムの所産を生み出す格好の原素材となり得たのである。しかもヘルダーの思想は、ボヘミア地域に十分に浸透し、まずは《スラヴ民謡歌》を出版したボヘミア出身のF.L.チェラコフスキー（1799-1852）へと引き継がれ、さらにモラヴィア出身の民謡収集家フランティシェク・スシル（1804-1868）の《モラヴィアの国民歌》（1835）や、何よりもボヘミア出身の詩人カレル・ヤロミール・エルベン（1811-1870）による《ボヘミアの歌と俚諺》（1844-64）の偉業へと引き継がれていった。

ところで、イギリスの音楽学者ジム・サムソンによれば、いわゆる音現象に見られる「チェコ民族主義」には、明らかに二つの局面、即ち、「素朴なるものと英雄なるもの」の表象が見られるという。²⁸⁾ まず前者の「素朴なるもの」とは、民族主義をいわば基層文化である民俗文化（フォークロア文化）と同一視する考え方に拠るもので、より具体的には、特に「農村生活を謳歌したもの」がこれに相応すると考えられるだろう。言うまでもなく、これは「民俗文化（フォークロア文化）と民族主義の同一化」を目指す方向であり、まさにドイツ・ロマン主義の影響の下、フォークロアを基層文化とする考え方に相違ない。そして何よりもそのような「フォークロア（民間伝承）」と「民族精神（Volkgeist）」との連関は、ヘルダーの言語重視の視点と類似し、「農民を汚染されていない民族文化の担い手とする」といった曖昧な考え方に一部依拠するものであった。なぜならば、ゲルナーが述べるように、「ナショナリズムは、通常、一般に民衆文化と思われるものの名において経験するから」であり、「その象徴記号は、農民や<フォルク>や<ナロード>の健康的で素朴で生き生きとした生活から引き出されてくる」と説明されるからである。³⁰⁾ その証左として、確か

に19世紀において民謡と民俗舞踊は特別扱いされ、収集活動は大いに勢いを増したといえる。そして、チェコ東部のモラヴィア地方ではロマン主義者パヴェル・クシーシュコフスキー(1820-85)がモラヴィアの民謡にもとづく優れた合唱音楽を創作したのにつづき、19世紀後半のボヘミアではA.ドヴォジャーク(1841-1904)が、ウィーンの批評家E.ハンスリック(ウィーン大学教授)やJ.ブラームスらの支援を得て、まさにフォークロアに基づく「スラヴ的な民族表現」を駆使しながら、交響曲や室内楽曲といった純器楽曲である絶対音楽の分野で、「チェコ国民音楽」をさらに国際的舞台に登場させることに成功したのである。

これに対し、後者の「英雄なるものの表象」というのは、明らかに歴史的かつ神話的な題材に基づく、より具象的なプログラムを内包する音楽作品に認められるだろう。即ち、「英雄なるものの表象」こそ、「進歩的な西欧の中のチェコ文化」を標榜する動きとなって顕現されたのである。ここにおいてフォークロア音楽や大衆音楽は、いわば「地方色(ローカル・カラー)」を活写する象徴的な手段として用いられたのであり、そこには「民族主義とモダニズムの融合したかたち」を見ることができよう。まさにJ.サムソンが指摘するように、それこそが「民族的イメージと象徴を核として創作、つまり歴史や文学といった音楽外の民族的文化の象徴と繰り返し結び付ける」³¹⁾という究極の手法であったといえよう。こうしてチェコの作曲家であるB.スメタナ(1824-84)やZ.フィビフ(1850-1900)らは、チェコ古代の神話やボヘミア王国の黄金時代、さらにはフス教徒運動等々、ナショナル・アイデンティティの源泉となる「文化的記憶」としての、いわば歴史的テーマと伝説的テーマに依拠した具象的な標題音楽構想を標榜して「チェコ近代音楽」を樹立しようとしたのである。

確かにスメタナが目指したのは「近代的でチェコの」な音楽の創造であったが、彼自身は、素朴さと英雄の各表象を結びつけるという、つまり民族的イメージや象徴と進歩的ヨーロッパの音楽とを結合することに力を注いだ。これによってスメタナの音楽には、民謡による社会的機能の有用性が作品の深層部に隠されることになり、例えば「ボルカ」は民俗舞曲の形式であると同時に、「人民の踊り」や「農村の情景」を象徴化するという、いわば「記号」の役割を果たすものとして捉えられるのであった。折しもB.ニェムツォヴァー(1820-62)が書き下ろした『祖母』(1854)という小説は、当時の農村生活をリアルに活写するものであり、しかもチェコ語への愛着や地元庶民の倫理感といったものを伝えようとしていた。それを裏付けるように、19世紀チェコの文学界では、こうした「農村や田園生活そのもの」が純粹にチェコのなるものの、そして地方的なものの根源として強く賛美される風潮があったという。³²⁾換言すれば、「農村や田園の生活や情景」を象徴化し、記号として作品の中に盛り込むことで、「素朴なるもの」を暗示的に表出することに成功したのであり、それこそがチェコ人にとっての、具象的なアイデンティティの表出法であったと解することができるだろう。

このように、チェコ人による「民族主義の表現法」には、少なくともJ.G.ヘルダーが指摘したような「民俗文化(フォークロア文化)の中に民族精神(Volksgeist)を透視する方向」と、さらに「音楽外の具象的な民俗文化を結びつける方向」という2つの書法が顕著に見られたのである。何れにせよ、伝統文化にもとづくチェコ民族の「再生運動」の到達点は、チェコ文化研究の第一人者である石川氏が指摘するように、まさに「フォークロア的なチェコ語・チェコ文化を、ドイツ語・ドイツ文化と競合しうる自立的な文化的有機体へ高めようとする運動へと発展」していったものであり、「近代的なチェコ『国民』を作り出そうとする運動、つまりチェコ人の『国民形成運動』ないし『国民創成運動』へと展開」していくことになる。さらに言えば、「その最終的な結果として、第

一次大戦後のチェコスロヴァキア共和国の成立、現在のチェコ人の国民国家があるのであり、…『民族復興運動』はチェコ民族とその言語・文化を復興し、『民族劇場』を生み出したばかりでなく、エスニックな『ナーロード（民族）』を近代的な『ナーロード（国民）』に変え、『民族劇場』を『国民劇場』に変える錬金術にもなった」と結論づけることができるだろう。³³⁾

IV 結びにかえて 一世紀末プラハの思想から ～ボヘミアにおける文化の複合性と知的世界の形成へ～

ボヘミアにおける民族の確執は、結果として、多くのドイツ人やユダヤ人を苦悩の淵に追いやることになったというのもまた事実であった。1880年から1900年の間に、プラハに在住するドイツ人の割合は15.5から7.5パーセントに減少し、民族間の争いはボヘミアのドイツ系知識人の世界観にも濃い影を落とし始めた。彼らが思い描く宇宙とは、民族の争いを反映し、善神と悪神の戦いをとる「グノーシス派」の宇宙論であった。特に、ユダヤの悪い創造神に対し、最高の善神の使者キリストの告げる愛の福音に従うという「マルキオン (c. 85-160) 説」は、現世の法への敵意と、遠い未来の救済の約束を特徴としており、例えば作家のフランツ・カフカは、まさに法というものを、「救済を阻む壁」として描いたことでよく知られる。このグノーシス派的な考え方は、当然の事ながら1860年頃までボヘミアに広く浸透していた、いわゆる神と創造世界の間に調和を見るという「ライブニツ流の摂理観」を当然、覆すものとなったのと同時に、とりわけマルキオンの世界観は、何よりもユダヤ人作家たち（パウル・アードラー、フランツ・カフカ、マックス・プロート、フランツ・ヴェルフエル他）の心を捉えたのである。というもの、彼らは、1878年から90年にかけてプラハに生まれ、チェコ人とドイツ人のもっとも激しく対立した世代の人間であった。その一人、劇作家のP. アードラー（1878-1946）は、悪しき世を創造した神を告発する作品を残したように、フランツ・カフカ（1883-1924）の作品の根源にあったのも「世の法への恐れだ」という。それは即ち、「官僚制がこの世を悪性に行っているばかりでなく、天国にも官僚制があり、そこでも救済の道は閉ざされている」と考えるものであった。このようにプラハで育ったユダヤ人作家たちは、やがて「世界没落の幻像」といったものを内に抱くようになっていったのである。³⁴⁾

プラハの町は、こうして神の創世に対する「激しい告発の思想」を生み出す場ともなったように、確かにプラハに蔓延していた「グノーシス的思想」は明らかに陽気な「ウィーンの耽美主義」³⁵⁾とは全く対照をなすものであったことに相違ないであろう。言い換えるなら、ウィーンではまさに「文化の飽食」が顕著に見られたのに対し、プラハではドイツ人、とりわけユダヤ人らが自らの文化を守り抜くために、必死に追い詰められながら闘ったことを象徴しているといえる。³⁶⁾

そして何よりもハプスブルク帝国の時代、ボヘミアとモラヴィアでは、まさに多くの知的人材を世に送り出す結果となったことに驚愕するであろう。その多くはまずウィーンで活躍したことが知られており、翻って彼らの存在は寧ろウィーンの知的生活をきわめて豊かなものにしたと考えられる。その中には、ユダヤ人ジークムント・フロイト、エドムント・フッサール、カール・クラウス、ヴィクトル・アードラー、グスタフ・マーラーらが含まれていた。一方、非ユダヤ人では、ローベルト・ツィンマーマン、ベルタ・ヴォン・ズットナー、ヨーゼフ・シュンペーターら、カトリック信奉の人たちの名を挙げることができる。このように考えていくと、W. M. ジョンストンが述べるように、ボヘミアの思想界は、いわゆる改革派カトリシズムによる「ヨーゼフ主義」の伝統全体の幸福に対する関心を人々の心に鼓吹しつつ、ボヘミアと、さらにモラヴィアをも、ヨーロッパで

例のない知的温床の地と変貌させたのである³⁷⁾。

註

- 1) 出典：林忠行 1993: 15.
- 2) Peter. F. SUGAR & Ivo. J. LEDERER (eds.) 1990 (初版1981): 8.
- 3) H. KOHN 1961: 330.
- 4) S. J. TAMBIAH 1993: 58-59.
- 5) 青木保 1993: 15-17.
- 6) 同上書: 16.
- 7) 三島由起夫 1983 (1969): 282-283. を参照せよ。但し、「文化防衛論」を執筆したのは、1968年頃とされる(1969年に刊行)。さらに三島はその中で、「文化を生む生命の源泉とその連続性に断弦の時を刻んだ戦後の日本文化の有り様」に一石を投じている。こうした言説と関連して、いわゆる「民族のアイデンティティ」を決定するのは「主観的意識か、或いは客観的属性か」といった議論もまた射程に入れるべきであろう。文化人類学者の小田亮氏は、「民族」それ自体を把握するにあたり、まず客観的属性によって規定される実体として捉える「実体派」と、主観的意識によって規定される虚構として捉える「虚構派」の2つの立場があることを示している(小田 1994: 18)。
- 8) ZACEK 1990: 137.
- 9) *ibid.*: 138.
- 10) 石川 2000: 30 を参照。
- 11) 同上書: 30.
- 12) BOGDAN 1993: 60.
- 13) 丹後 1997: 181.; Siehe, GELLNER 1993: 333.
 そもそもチェコ地域では、「ボヘミア人」「モラヴィア人」「シレジア人」といった、むしろ土地に根ざした地域意識というものが存在していたと考えられており(林〔南塚編〕1990: 79)、その結果として、チェコ地域という土地を支配していたドイツ文化圏の中にある貴族たち(つまりドイツ系貴族)は、チェコ人知識人による文化運動に資金を提供するという動きに出た。他方、ナポレオン時代のウィーン政府の政策は、ナポレオン率いるフランス国民軍に対抗する為に、国民を動員しようと愛国心に訴える必要があった。しかしながら、それぞれの地域主義が強かった為に、その地域の愛郷心に訴えて、自分等の故郷を守るといった方が強くアピールできたのである。こうしてヨーゼフの中央集権政策の緩和により、それぞれの愛郷心が認められることになった。やがて農民層への浸透は、文化的にも、いわゆる基層文化への、つまりフォークロアへの開眼を促すこととなったのである。
- 14) In: SUGAR 1990: 17.
- 15) In: BONNOURE 1969: 69.
- 16) In: SUGAR *op. cit.*: 17.
- 17) In: TAMBIAH 1993: 50-52.
- 18) ZACEK *op.cit.*: 144.
- 19) ライブニツ調和説およびチェコ地域におけるドイツ人とチェコ人との間の相互関係については、W. M. ジョーンストン著『ウィーン精神Ⅱ』(472-95頁)に詳述されている。
- 20) JOHNSTON 1992: 472.
- 21) Siehe, *ebenda*: 472ff.

- 22) 1848年5月; See, in BOGDAN 1993: 159-160. この他、パヴェル・シャファークの『スラヴ古代文明』(1837)や、演劇ではM. ストゥナ、人形劇ではM. コペツキーらの活躍が目される。
- 23) See, ZACEK *op. cit.*: 150. 急進的なチェコ民族主義政党(青年チェコ党)の指導者カレル・クラマーシュ(1860-1937)はネオ・スラヴ主義の立場から帝政ロシアに接近し、ボヘミア王国の王位にロシア人大公を就けることを望んだのに対し、チェコスロヴァキア共和国初代大統領T.G. マサリク(1850-1937)は、必要ならば西欧の王室を招く考えで、西欧型の共和国を希求した。
- 24) See, *ibid.*: 191.
- 25) Siehe, JOHNSTON, *a. a. O.*: 461-462. 1902年、モラヴィア出身の出版人フランツ・イエッサー(1869-1949)によって「スデーテン・ドイツ人」という造語が誕生した。この造語は即ち、ボヘミア・モラヴィア・オーストリア領シレジア地方のドイツ人を総称するもので、同地域のドイツ人を一体と考え、チェコ人に対抗することを示唆していた。一方、対立の様相は様々なところで認められた。チェコ系の銀行はチェコ人に融資し、ドイツ人の所有する店舗や事業の買い取りを推進していったのである。持ち主が変われば、看板もまたチェコ語にすぐ塗り替えられるという有様であった。「ドイツ人と結婚しないように」といった呼びかけすら聞こえてきたという。
- 26) GELLNER 1993, *op. cit.*: 27.
- 27) *ibid.*: 27. ここで言う「高文化」とは、「ナショナリズムが復活させたり捏造したりするものは、自分の地域的な(読み書き能力に基づいて専門家によって伝えられる)高文化だからである」(GELLNER 2000: 98)とゲルナーが指摘するように、まさに読み書き能力に基づく、いわゆる高踏文化(ハイ・カルチャー)を意味していることが理解されよう。これに対峙するように「民俗文化(フォークロア文化)」とは、口頭伝承による低文化を示唆していると見ることができる。
- 28) ヘルダーによるボヘミア民謡のアンソロジーの収集には、以下のような歌が掲載されている。即ち、《古代の民謡》(1773/1774年出版)。2巻本の《民謡集 Volkliedern》(Leipzig 1778/1779)より、「君主の食卓、ボヘミアの歴史」。さらに《歌に宿る諸民族の声 Stimmen der Völker in Liedern》(Tübingen 1807)より、「山の馬、ボヘミアの伝説」等々。
- 29) See, SAMSON 1996: 21-24.
- 30) GELLNER 1993, *op. cit.*: 30. & GELLNER 2000, *op. cit.*: 98.
- 31) SAMSON *op. cit.*: 33.
- 32) HORSBURG 1985: 95.
- 33) 石川 2000 (前掲書) : 79.
- 34) JOHNSTON *a. a. O.*: 467-68. を参照せよ。グノーシス派とは、2世紀にアレクサンドリア等に現れた神秘思想がキリスト教と結びついたもので、徹底した霊肉二元論を唱える、いわゆる古代キリスト教の異端を指す。天上界の最高神と地上界の造物者、霊的キリストと歴史的イエスを区別し、キリストは造物者によって創られたイエスに宿ったが、イエスが十字架に死する前にキリストは去ったとし、物質界から解放された霊的世界の英知を覚知する者は、不死を与えられ、天上界に住むと説く思想であり、3世紀には衰退したとされる。
- 35) マリア・テレジアの時代の厳格な道徳、警察の存在によって独特の性格を持つようになった19世紀前半のウィーンに多く見られた「逸楽的生活」に価値を置く立場を指す。つまり、庶民的娯楽に満ちた陽気に芸術を楽しむ「耽美主義」に対し、政治や社会の改革に無関心な態度を示す精神性という、道徳の厳しさと逸楽に耽る心の対立が、ウィーン人独特の精神性を生み出したと考えられる。
- 36) JOHNSTON *a. a. O.*: 471. ズデーテン地方で生まれ育ったユダヤ人にとって、彼らの家庭にいたチェコ人家政婦や乳母(農民的愛や敬虔さを伝えた)から受けた影響も見逃せないとしている。モラヴィアの小村フライベ

ルクで生まれ、3才までそこに育ったフロイトにも、面倒を見てくれるチェコ人女性がいたという。これはまさに、幼少期における体験が知的逸材を生み出すに至ったことの証左である、とジョンストンは述べている。

37) Siehe, *ebenda*: 464-471.

より具体的に言えば、現象学のフッサール、精神分析学のジクムント・フロイト、実存主義のフランツ・カフカ、構造主義のヴィレーム・マテジウス、ロマン・ヤコブソン、遺伝学のメンデル、相対性理論のアルベルト・アインシュタイン（1911-12年までプラハで活動した）、意味論のルドルフ・カルナップ（1929-34年プラハで活動）、不完全性定理のクルト・ゲーデル、無限の数学的理論のベルナルト・ボルザノ（プラハで生まれ活動した）等々（石川 前掲書：79）。

引用・参考文献

青木 保

1993 「文化とナショナリズム」『思想』（1993年1月号, No.823）, 東京：岩波書店, 4-18.

BOGDAN, Henry (アンリ・ボグダン)

1993 『東欧の歴史』東京：中央公論社。

BONNOURE, Pierre (ボヌール, ピエール)

1969 『チェコスロヴァキア史』山本俊朗訳, 東京：白水社。

CARR, Edward Hallet (カー, E. H.)

1974 (1952) 『ナショナリズムの発展』（大窪訳）, 東京：みすず書房。

CLAPHAM, John

1972 *The Master Musicians Smetana*. London: J. M. Dent & Sons LTD.

DAHLHAUS, Carl

1979 “Über die Idee Nationalismus in der Musik des 19.Jahrhunderts”.

Colloquia Musicologica Idea Národnost a Novodobá Hudba (BRNO 1972/73), PEČMAN, R. ed., pp.426-435.

GELLNER, Ernest (ゲルナー, アーネスト)

1993 「今日のナショナリズム」『思想』（1993年1月号, No.823）, 東京：岩波書店。

2000 『民族とナショナリズム』加藤節監訳, 東京：岩波書店 [原著: *Nation and Nationalism*, 1983, Oxford: Blackwell Publishers.]

林 忠行

1993 『中欧の分裂と統一—マサリクとチェコスロヴァキア建国—』東京：中公新書。

HERDER, Johann Gottfried

1975 (1778/79 & 1807) *Stimmen der Völker in Liedern: Volkslieder Zwei teile 1778/79*. hrsg. Heinz Rölleke, Stuttgart: Philipp Reclam Jun. Universal-Bibliothek Nr.137/[6].

HOBBSAWM, Eric & RANGER, Terence (eds.) (ホブスボウム, エリック ; レンジャー, テレンス編)

1992 『創られた伝統』（前川啓治・梶原景昭他訳）, 東京：紀伊國屋書店。

HORSBURG, Jan (ホースブルグ, ヤン)

1985 『レオシュ・ヤナーチェク一人と作品』和田亘・加藤弘和訳, 東京：泰流社。[原著: 1981 *LEOŠ JANÁČEK*. London: David & Charles Newton Abbot.]

HOSTINSKÝ, Otakar

1869 “Umění a národnost [芸術と国民性]”. *Dalibor* VIII: 1-2, 10-11, 17-18.

(In 1974 *Otakar Hostinský. Studie a kritiky*. Praha: Československý spisovatel, pp.9-16).

- 1941 (1901) *Bedřich Smetana a jeho boj o moderní českou hudbu* [スメタナとチェコ近代音楽をめぐる論争].
Praha: Jan Laichter.
- 石川達夫
2000 『黄金のプラハ 幻想と現実の錬金術』東京：平凡社。
- 伊東孝之他編
1993 『東欧を知る事典』東京：平凡社。
- JOHNSTON, William M. (ジョンストン, W. M.)
1992 『ウィーン精神 II ハプスブルク帝国の思想と社会 1848-1938』井上修一・岩切正介・林部圭一共訳,
東京：みすず書房。
- KOHN, Hans (コーン, ハンス)
1961 *The Idea of Nationalism: A Study in its Origin and Background* (2nd ed). New York: Macmillan.
- 三島由紀夫
1983 (1969) 「文化防衛論」『裸体と衣装』東京：新潮文庫, 281-321。
- 南塚信吾編
1990 (1989) 『東欧の民族と文化』東京：彩流社。
- 内藤久子
2002 『チェコ音楽の歴史 一民族の音の表徴一』東京：音楽之友社。
- NEJEDLÝ, Zdeněk
1908 *Zpěvohry Smetanovy* [スメタナのオペラ]. Praha: Státní nakladatelství politické literatury (2.vyd., Praha 1954).
- NĚMCOVÁ, Božena
1984 (1854) *Babička Obrazny Venkovského Života* [祖母 農村生活の描写].
Praha: Slunovrat Edice české Klasické Prozy a poezie.
- OČADLÍK, Mirko & SMETANA, Robert (eds.)
1971 *Československá Vlastivěda Díl IX, Umění·Svazek 3 Hudba* [チェコスロヴァキア郷土誌 第9巻, 芸術・3 音楽].
Praha: Horizont.
- 小田 亮
1994 「民族という物語－文化相対主義は生き残れるか」合田・大塚共編『民族誌の現在』東京：弘文堂,
14-35。
- SAMSON, Jim (サムソン, ジム)
1996 「中央ヨーロッパ東部：民族的アイデンティティ獲得への苦闘」『西洋の音楽と社会 9 後期ロマン派 II :
世紀末とナショナリズム』ジム・サムソン編, 三宅幸夫監訳, 9-41, 音楽之友社。
- 薩摩秀登
1991 『王剣と貴族－中世チェコにみる中欧の国家』東京：日本エディターズスクール出版部。
- SMETANA, Robert (ed.)
1972 *Dějiny české hudební kultury 1890-1945, Díl I : 1890-1918* [チェコ音楽文化史 I].
Praha: Academia, Československá Akademie Věd.
- SUGAR, Peter, F. & LEDERER, Ivo J. (eds.) (P. F. シュガー & I. J. レデラー編)
1990 (1981) 『東欧のナショナリズム 歴史と現在』東欧史研究会訳, 東京：刀水書房。
[原著：1969 *Nationalism in Eastern Europe*. U. S. A.: University of Washington Press.]
- TAMBIAH, Stanley J. (タンバイア, スタンリー J.)

1993 「エスノ・ナショナリズム - 政治と文化」『思想』1993年1月号, No.82 (岡本真佐子訳), 東京: 岩波書店, 50-63頁。

丹後杏一

1997 『ハプスブルク帝国の近代化とヨーゼフ主義』東京: 多賀出版。

ZACEK, Josef F. (ザツェク, ヨーゼフ・F)

1990 (1981) 「チェコスロヴァキアのナショナリズム」『東欧のナショナリズム 歴史と現在』

P. F. シュガー & I. J. レデラー編 (東欧史研究会訳), 東京: 刀水書房, 135-192頁。

(2008年10月14日受付, 2008年10月16日受理)